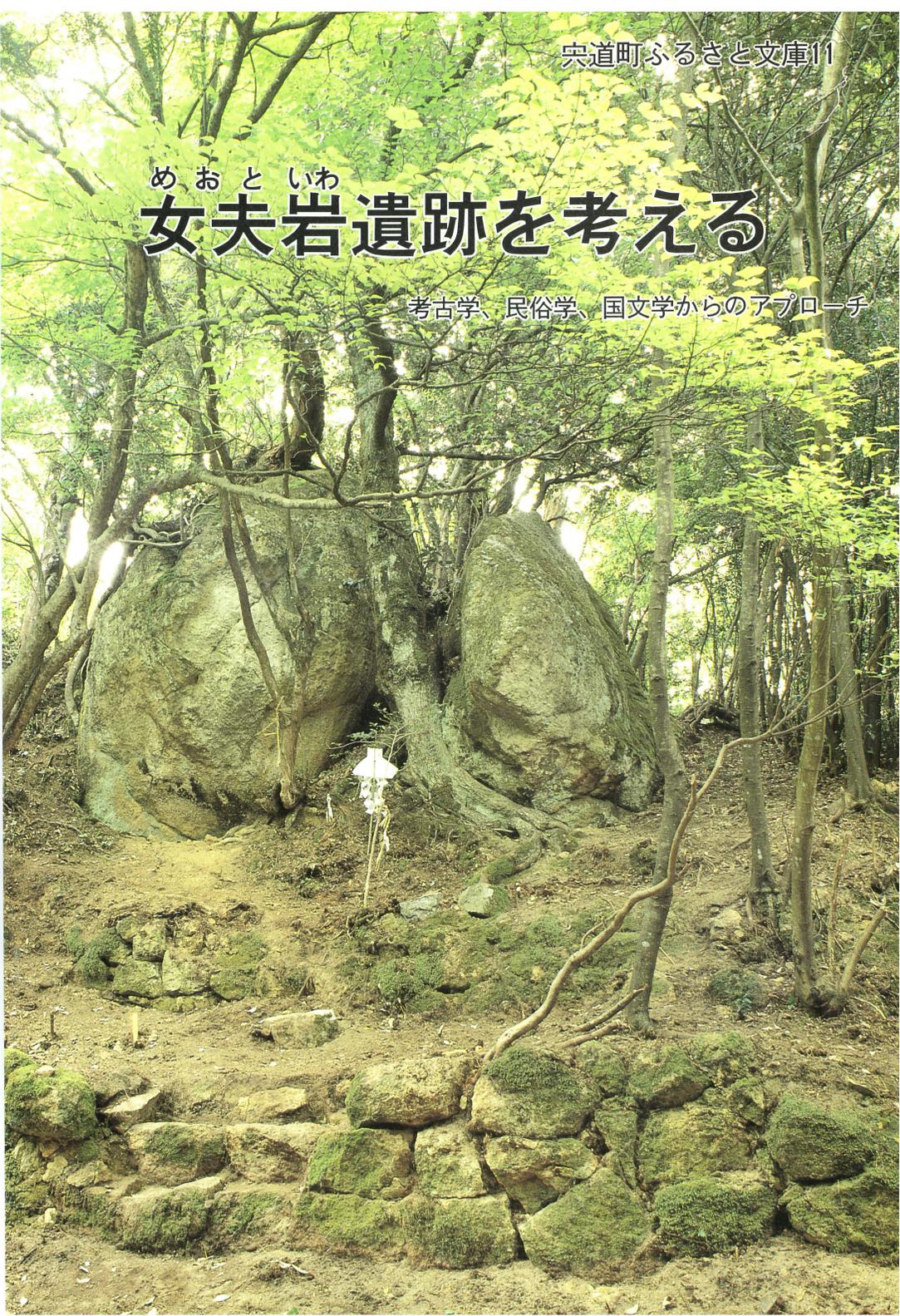


奥道町ふるさと文庫11

めおといわ
女夫岩遺跡を考える

考古学、民俗学、国文学からのアプローチ



発刊にあたって

宍道町大字白石字女夫岩（宍岩）にある女夫岩とその周辺は古くからのお祭り（石神信仰）が静寂の中に続けられてきた場所であり、宍道の地名由来にかかわる『出雲国風土記』（733年）記載の猪石との伝承をもつことで知られていました。

ところが、中国横断道尾道松江線予定内に含まれたことから、その歴史性と保存をめぐる多くの関心と呼ぶとともに、遺跡の発掘調査によって遅くとも5世紀中頃に溯る祭祀遺跡であることも確認されています。

このような中で、「女夫岩遺跡シンポジウム」の開催によって遺跡への歴史学、考古学、民俗学、国文学からのアプローチが試みられ、その重要性が改めて認識されるようになりました。

本書は、関係者のご了解を得て、「女夫岩遺跡シンポジウム」の記録をまとめたものです。多くの皆様にご活用いただければ幸いです。

（シンポジウムでは通称の「夫婦岩」を用いましたが、本書では遺跡所在地の字名をとって「女夫岩」としました。）

宍道町教育委員会
八雲本陣記念財団

はじめに

中国横断自動車道尾道一松江線の路線発表に伴い、そのルート内に宍道町大字白石字宍岩にある女夫岩が含まれていることが明らかになりました。

女夫岩は古くからの祭祀遺跡であるとともに、宍道の地名由来として『出雲国風土記』に記された「猪石」の可能性をもつものです。この貴重な遺跡の保存につきましては、地元の関係機関をはじめ、中央の行政機関でも協議が進んでいると聞きおよんでいます。

地域史研究団体である宍道ふるさと伝承の会では町観光協会、町婦人会、町商工会、神社神職会、大森神社総代会のみなさんと相図り、3回の見学会を催しましたが、もっと女夫岩について知りたいという多くの皆さんの要望を聞き、女夫岩遺跡をめぐるシンポジウムを企画いたしました。

シンポジウム実行委員長を木幡修介氏にお引き受け頂き、コーディネーターに藤岡大拙先生、パネリストとして白石昭臣先生、川島芙美子先生、平野芳英先生にお願いいたしました。

諸先生はそれぞれ歴史学、民俗学、国文学、考古学等の大家であり、遺跡の性格を知るに最も相応しいコーディネーター、パネリストであると思います。この機会をとおして遺跡としての女夫岩の認識をいっそう深めていただければ幸いです。

(宍道ふるさと伝承の会 坪内権吉会長の挨拶より)

女夫岩遺跡シンポジウム

コーディネーター 藤岡 大 拙
 パネリスト 木幡 修 介
 白石 昭 臣
 川島 芙美子
 平野 芳 英



写真1 女夫岩遺跡シンポジウム

藤岡 みなさん、こんにちは。暑いさなかでございまして、屋外はもうすでに35度をオーバーしていると思います。このクーラーの利きました室内でも、そういった外にも劣らないような灼熱の討議が行わ

れることをコーディネーターとしては期待しているわけでございます。

『出雲国風土記』に宍道の郷の記述がございます。ご存じのように大国主命が狩りをなさったときに追われた猪が石になった。その石が南の山に2つある。追っかけていった犬もまた石になったということでございます。



藤岡大拙氏

それらは高さがいくら、周がいくらと、具体的な数値が書かれています。その石はどこにあるのだろうかということは、昔からいろいろ言われてきていましたが、先ほどの坪内会長さんのご挨拶にもありましたように、宍道に高速道路がつくことになって俄然問題がでてきたということでございます。このあたりで一つ犬石とか猪石というものが、どこにあるのかということを考えてみたいと思います。

今日のご出席のパネリストは実行委員会の委員長の木幡先生、島根国際短期大学の教授で民俗学の白石先生、松江工業高校の先生で国文学の川島先生、そして、島根県の古代文化センターの学芸員で考古学がご専門の平野先生でございます。私は司会を承っております風土記の丘所長の藤岡でございます。

まず最初に、女夫岩が急に出てまいりましたが、女夫岩がなぜ猪石であるのか。石宮神社に猪石はきちんとあるではないか、猪石の上には犬石がご神体となってきちんとあるではないか、というような問題

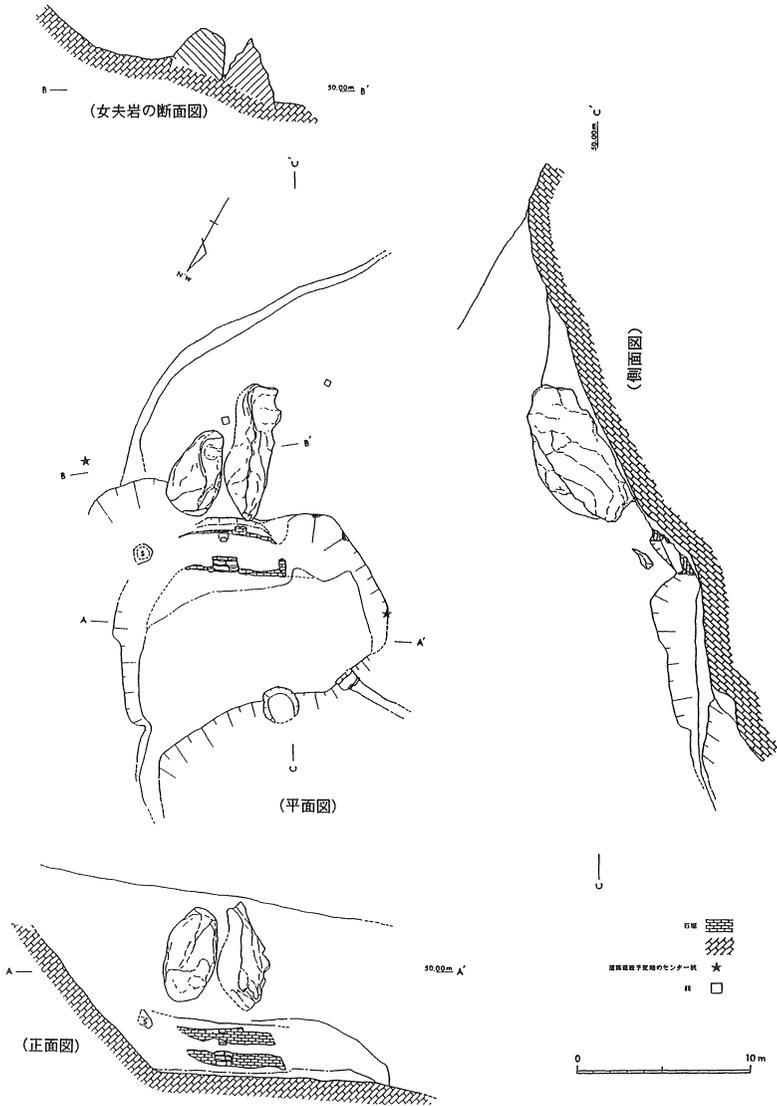


図2. 女夫岩遺跡遺構実測図

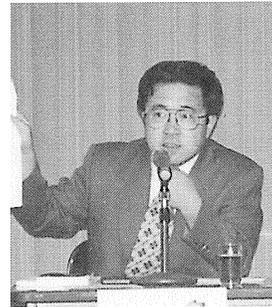
がございます。この辺のところをまずみなさん自身がお考えいただきますために、予備知識ともうしますか、問題を整理するという意味で、しばらく平野さんに基調発表していただきたいと思います。それでは平野さんお願いいたします。

平野 それでは先ず、図1をごらんいただきたいと思います。女夫岩遺跡周辺地形測量図というのがあります。図2も同じように女夫岩遺跡の図面です。

私は考古学を専攻しておりますので考古学の立場からいいますと、まず順番として、実体がどういうものであるかということです。

女夫岩というのはどれだけの大きさで、どういうものなのか、そして、島根県内に女夫岩と同じ様な大きな岩で、信仰の対象になっている、また、かつてそうであったものがどういったものか、そういったところから紹介させていただきたいと思います。

まず図2の図面がありますが、その図面で石の大きさがだいたいどれくらいなものなのかをみてみましょう。長さは9メートル、幅が2.5メートル、高さが4メートル以上というのが左の石になります。それからもう一方は長さが6メートル、幅が3メートル、高さ4.5メートル以上となります。このように、非常に大きな岩が2つ並んであります。女夫岩があるところがだいたい標高45メートルから50メートルぐらいの丘陵の尾根付近、だいたい一番上のあたりに2つの岩が露出



平野芳英氏



夫婦岩遺跡周辺

古墳時代中期の 祭祀用土器出土

出雲国風土記に登場し、島根県杵築町の地名起源となった「漣石」(しんいし)ではないかと注目されている夫婦岩遺跡(同町白田)周辺に「田家」で、古墳時代中期(五世紀)の祭りに使われた土器片が出土した。遺跡は従来、風土記の記述が指摘されていたが、少なくとも同碑(田家)までおのづから「祭石(さといし)」遺跡であったことが判明。発掘調査で古代の祭祀遺跡の実像が解明された例は全国でも少なく、研究者が注目している。

土師器の高坏片など200点

発掘調査は、遺跡の性格を把握するため、七月初めから同町教委や県教委が実施。二つの巨岩がある山の斜面一帯で十二カ所の試掘溝を入れた。

その結果、巨岩の下北西と南西側を中心に、丘陵の広範囲に渡る八カ所の試掘溝から、古墳時代中期の土師器(はじき)の高坏(たかづき)や、同後期以降の須恵器(すえぎ)の壺(つぼ)の破片など約二百点が出土。土器の種類から、祭りの際、供え物を盛った土器と考えられる。

島根県内で、正式な発掘調査により古墳時代の祭祀

遺跡が確認されたのは、夫を娶えたとの神話を記載、いわれも同遺跡から、古墳時代初期が初めて。神が天から降りた場所として、古くからの信仰の対象とされてきた。同碑(田家)にも、かつて、発掘調査で古代からの祭祀遺跡と判明した遺跡は数カ所しかない。

夫婦岩遺跡は、中国横断道(横断)松江線の建設予定ルート上へ発見され、地元が日本道政公団へ保存を要請している。

出土品は編みこまれた出雲国風土記には、赤道郷(しんどうこう)は、大國(おおくに)が石に姿

を娶えたとの神話を記載、いわれも同遺跡から、古墳時代初期が初めて。神が天から降りた場所として、古くからの信仰の対象とされてきた。同碑(田家)にも、かつて、発掘調査で古代からの祭祀遺跡と判明した遺跡は数カ所しかない。

1996年8月3日付
山陰中央新報記事

した可能性が浮き彫りになった。四百年後一時からは、同町中央公民館で夫婦岩シンポジウムが開催。調査結果を踏まえた論議が期待される。

祭祀考古学会委員の楢山林継・国学院大学教授の話を古墳時代の祭りの場であり、しかも風土記の伝承の地だった一連の遺跡の性格が考古学的に解明された意義は、全国的に大きい。

しているのです。

さらに図1、或いは表紙裏の地図を見ますと女夫岩の正面に向かって谷が開けており、女夫岩の下に池（夫婦岩溜池）があります。元々その池の脇をぬけ、谷に沿った参道を上って女夫岩にお参りしていたわけです。

現地に行きますと、女夫岩正面の谷の木が非常に若く、いつ頃かわかりませんが、植林されたようです。もしかすると、谷の奥にある女夫岩は西の麓の方から見ればきれいに見える時期があったのではないのでしょうか。

もう一度、図1、図2を見ていただきますと、女夫岩の前に平坦部があります。これは明らかに後に石垣を作って、平坦部を作って、そこで何らかのお祭りがおこなわれていたのではないかと思います。これは現地に行かれた皆さんには、その平坦地で何かやったのではないかということは、理屈なしにわかると思います。ただ、あの石垣がいつ頃作られたかについては現在のところ手がかりがありません。

8月3日付、山陰中央新報の記事（前ページ）によりますと女夫岩前面の斜面から、試掘調査によって古墳時代中頃（5世紀代）のものを含めた土器片200点ぐらいが出たということです。その平坦部にあったものが下に流されたと考えられます。それが発掘されているわけですから、少なくとも古墳時代の中頃（5世紀、1500年くらい前）には、女夫岩正面で何らかのお祭りがされていたというのは十分考えてもいいと思います。

今見える石垣が古墳時代のものなのか、もっと新しいものなのか、その辺はちょっとわかりませんが、一応あの女夫岩が何らかの形で地元の人に信仰の対象として扱われていたというのは、この記事そのまま素直に読めば古墳時代から信仰されていたということが十分わかります。

それで、先ほど言いましたように女夫岩と同じ様なものが島根県内でどれくらいあるのか、全部紹介するわけにはいきませんが、いくつかの例を見ていただきたいと思います。

最初が^{なてぬい}楯縫郡の^{かななび}神奈備山、現在の平田市の大船山という非常にきれいな山です。(写真2) ^{えぼうし}烏帽子岩という岩が山頂にあります。(写真3) これも石の神様の一つです。そして、この山に滝壺がありまして、こ

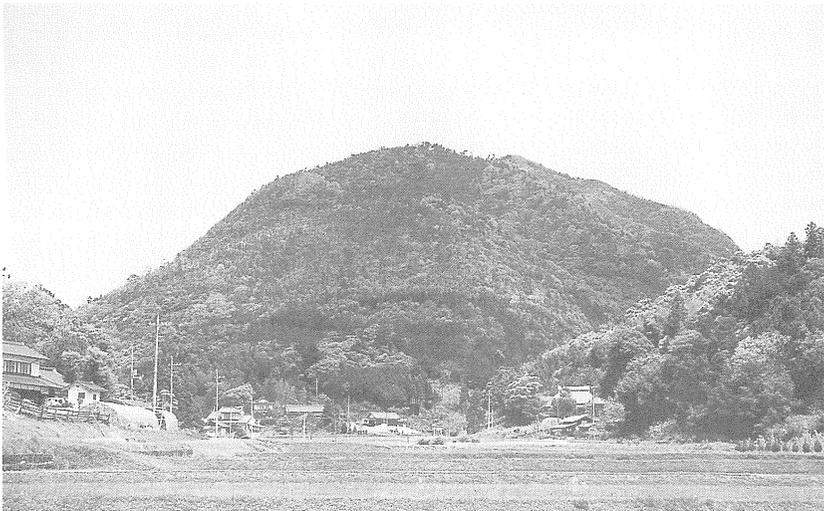


写真2. 大船山遠景 (平田市)

の滝壺の周辺から土器が拾われています。女夫岩の土器が古墳時代の中頃ということですが、これらの土器はもう少し古くて古墳時代の前期ぐらいまではもっていったらいいと思います。もうひとつ前の弥生時代のものもあるという人もいますが、一応、古墳時代前期までの土器があるということです。(写真4)

次に飯石郡の^{ことびき}琴引山です。『出雲国風土記』にも琴引山という名

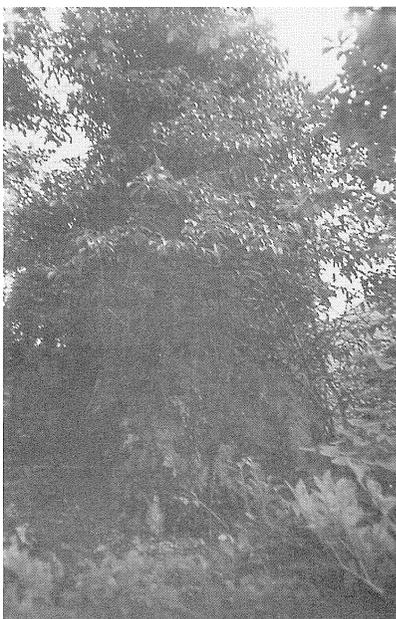


写真3. 大船山の烏帽子岩

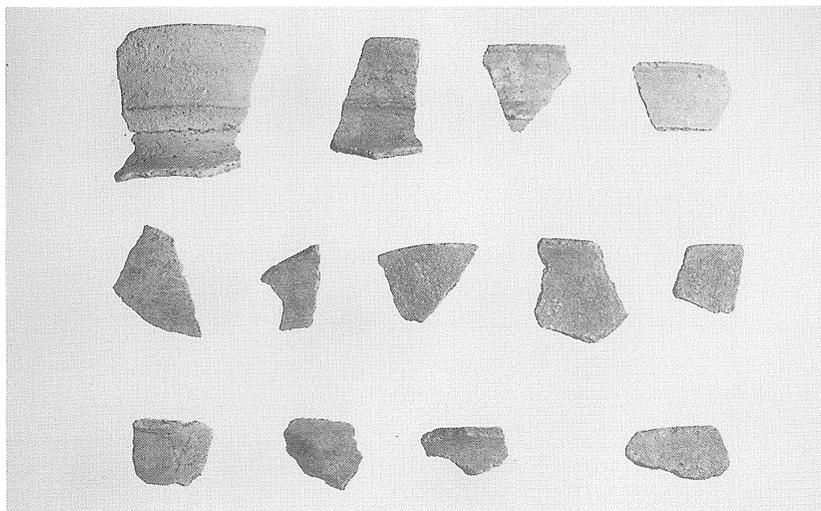


写真4. 大船山遺跡表採土器

前が出てくる山でして、頓原町の方から見ますと非常にきれいな姿を見ることができます。この琴引山の上にも、大きな岩に挟まれた神社があります。そこに大きな岩でできた窟いすやがあります。この窟いすやのことは『出雲国風土記』にも「窟あり」とでています。ですからここもいわば風土記時代には信仰の対象となっていたということがわかります。

(写真5、6)

次に恵曇えともしも神社ですが、これは今の鹿島町役場の後ろに神社があります。この本殿の後ろの斜面に大きな岩が2つあります。これもやはり現在信仰の対象になっておりまして、この岩のあるところが本来の恵曇神社のご神体といたしますか、神社そのもので、その後には先ほどお見せいたしました恵曇神社ができたのではないかと考えられております。この岩は行ってすぐ見られますので興味のある方はごらんになっていただければと思います。(写真7)



写真5. 琴引山遠景 (頓原町)

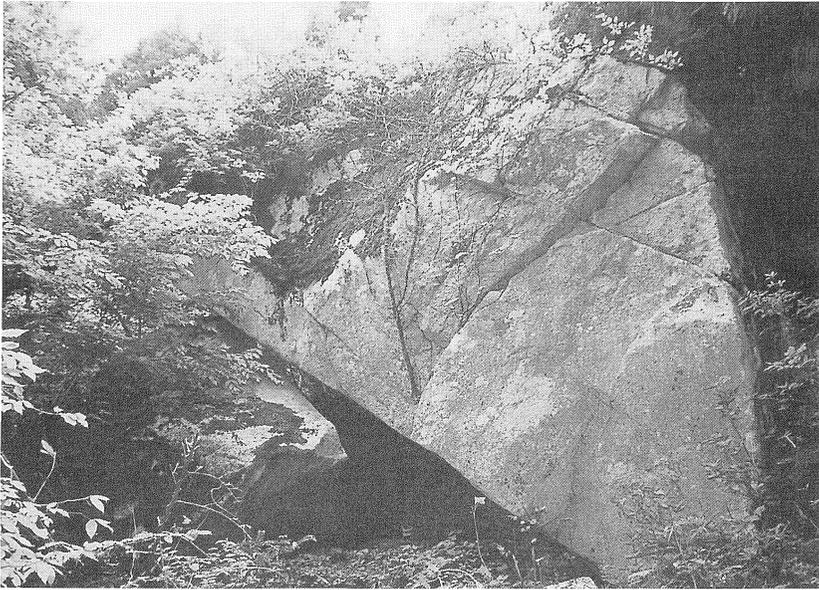


写真6. 琴引山の^{いわや}窟



写真7. 恵曇神社の石神

次に飯石^{いいし}神社です。本殿の後ろの岩がご神体として信仰の対象になっています。これはそれほど大きくはありませんが、岩のような自然のものを神様としてあがめて崇拝するという信仰の形が神社として伝わっている一つの例であります。(写真8)

次に地元の石宮^{いしみや}神社です。これはみなさんよくご存じの石宮神社の猪石です。それからご神体の犬石です。これも先ほどの飯石神社と同じようにこういった岩がご神体としてあがめられています。(写真9、10)

最後に女夫岩です。下の池の方から上っていきますと参道が作られておりまして、やはり、いつの時代からか、きちんとした形での信仰の対象となっているということがいえると思います。(表紙、写真11)



写真8. 飯石神社のご神体

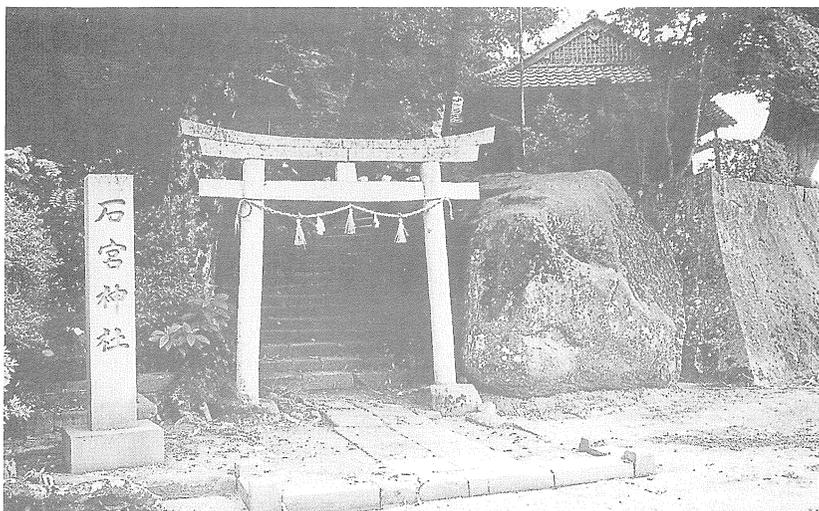


写真9. 石宮神社の猪石

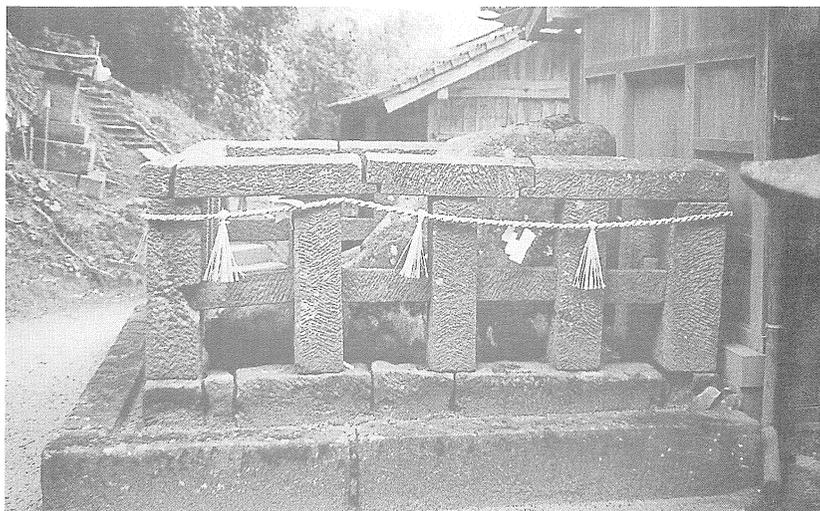


写真10. 石宮神社の犬石



写真11. 夫婦岩溜池より女夫岩を望む



図3. 大社千家所蔵の女夫岩の図
(神社新報より)

図3は神社新報に掲載されたもので、一般の方は、目にする機会がないと思いますが、これは江戸時代に書かれた女夫岩のお祭の図です。千家家に伝えられている絵で、この女夫岩が江戸時代には出雲大社の宮司である千家家により祭祀が執り行われていたことを示す貴重なものです。

また、熊野大社の本宮とい

われる場所にも大きな自然石があり、平田市の方には、「かなめ石」といわれるような1.5mもある大きな岩があったりということで、島根県内各地にこういった大きな岩が信仰の対象とされていたことをうかがうことができるわけです。

以上のような巨岩が信仰の対象とされていたと考えられる遺跡をみますと、現在のところ古くは平田市の大船山山頂周辺で確認されている古墳時代前期の祭祀の痕跡、あるいはこの女夫岩では古墳時代の中期の頃の祭祀が最も古いものと考えられ、その後神社という形に整えられるものがあったりするけれども、様々な形をとりながら現在にまでその信仰の形態は伝えられていることを十分に確認することができます。

そうした中で、この宍道町の女夫岩は、さきほど藤岡先生からお話がありましたように、『出雲国風土記』に掲載されている、宍道という地名の起源伝承に深く関わる遺跡であるということで、非常に注目されているわけです。実際に奈良時代あるいはそれ以前の人が石宮神社の岩を意識したのか、女夫岩を意識石としたのかはさておいても、いま全国各地で、地名の変更と管理が行われ、自分達の住んでいる町の由来がだんだんわからなくなるとか、あるいはその由来を後世に伝えることができないようなことさえおきています。そうした状況の中で、遠く奈良時代の書物に、しかもその書物が全国で唯一完全な内容で残されている。『出雲国風土記』に記載されている町名起源に深く関係し、かつ信仰の対象であった場所が破壊されようとしているとこ

ろで、たくさんの人々から現状保存の要望が数多くだされているのだと考えられます。

藤岡　　ありがとうございました。『出雲国風土記』の^お意^う宇郡の宍道郷のところには次のように書かれています。「宍道郷。郡家の正西三十七里なり。所造^{あめのしたつらししおおかみのみこと}天下大神命の追ひ給ひし猪の像、南の山に二つあり。(一つは長さ二丈七尺、高さ一丈、^{めぐ}周り五丈七尺。一つは長さ二丈五尺、高さ八尺、周り四丈一尺。)猪を追ひし犬の像、(長さ一丈、高さ四尺、周り一丈九尺。)其^その形石となりて、猪と犬と異なることなし。今に至りても猶^{なほ}あり。故、宍道という。」こうなっております。猪石が2つと犬石が1つあると書かれております。その石がどこにあるのか。

古来、いろいろな説があったわけですが、たまたま女夫岩が道路にかかるというようなことから調査されて、古墳時代の土器がでてきたわけであります。

それでは、このあたりで石宮神社に今日でもございます、写真9、10にありましたように鳥居の両側に猪の石、階段を上った上のところにご神体としての犬石がある。こういうのが厳然としてある中で、さらに同じ白石でもずっと西にある女夫岩がひょっとしたら猪石ではないかというのが出てきた。その辺のところを白石先生はどのようにお考えになっているのか。このあたりから一つ話をさせていただきたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

白石　　白石でございます。私は民俗学の方をやっておりまして、そ

ういう猪岩とか犬岩にどういう意味があるのか、こういう点に大きな関心を抱いておるわけでございますが、そのシシという言葉が日本の文献の中で最初に出てまいりますのが日本書紀、天孫降臨の巻でございます。「そのしし（宍）のむなくくに……、吾^{あた}田の長屋の笠狭の崎」と書いてあります。シシといったら何なのかともうしますと猪でございます。シシというのは猪でありまして、沖縄ではブタです。



白石昭臣氏

だいたい猪の生存地というのはそんなに北の方ではございません。どちらかというとなの方でございます。この猪の伝承については『出雲国風土記』にいくつか載っているのですが、他にも古事記に大国主命の受難の話として伯耆^{ほうき}の焼けた赤猪石が落ちてきたという伝承があります。こういった猪とは何なのでしょうか。

例えば『日本書紀』の雄略^{ゆうりやく}天皇の条には猪を葛城^{かつらぎ}の山の神とみています。ここでは「雄略に猪が襲ってきたので、鳴鏑を放ったがどうにもならない、そこで山の本の又にまたがって難を逃れた。」という物語になっています。また、ヤマトタケルノ命が伊吹山^{いぶき}で猪を素手で捉えようとした物語がありますが、この猪も山の神です。他にも平安時代に編纂された『古語拾遺^{こごしやくい}』（大同3年）という書物には「御歳^{みとし}の神を祭るのに白猪、白馬、白鶏をもって祭る。」、あるいは、「おおとこぬしのかみ大歳神、田を営みます、その田の祭りにうしの宍を田人に食らわ

したまいき。」とあります。

このように猪は、山の神とみられています。この山の神は農耕と関わりがあるのです。山の神が、なぜ農耕と関わりがあるのかともうしますと、たとえば松江市の朝酌^{あさくみ}のような低い低湿地での農耕というのは山の神とは関係がございせんが、山の湧き水から開けた水田というのは関係が出てきます。そういう山の神の支配いたしますところに田んぼを作るときには、当然山の神をまつらなければなりません。

また古い伝承で狩猟ともうしますと、すぐ我々は、いわゆる狩りを思い浮かべるわけですが、食糧を確保するための狩りの内容は『日本書紀』、『古事記』には記載されておりません。もちろん、狩猟に関する伝説というのは、数多くあるわけで、ここでいう狩猟というのは一種の神事でございます。つまり山の神の化身である猪を殺し、神意を伺うのです。と同時にいったん山の神の化身である猪の魂を山に送り返し、そして、そこから再生を願って豊かな生産を願うということなのです。『播磨^{はりまのくに}国風土記』に「我は突^{しし}の血を塗^{たづくり}りて佃をする」とあります。

このような狩猟伝承は各地に残っており、今でもあります。例えば、薩摩^{さつま}の国の方にまいますと、柴^{しば}祭り、山陰ですと石見の国のお改め神事、あるいは松江市郊外の田村神社。これらの祭りでは全て農耕の祭りの前に狩猟をします。なぜ狩猟をするのか、なぜ農耕と関係があるのか。それは先ほど申しましたように山の神の領域で狩りをすることによって神意を伺う。そして、その魂をいったん山の神にお返

しし、そして再び再生を願って、例えば猪の血を塗って豊穰^{ほうじょう}を願う、そういった農耕的色彩があるのです。

もうひとつ押さえておきたい重要なこととして、農耕のためには水のわき出るところを大切にすることです。私たちの先祖というのは水との戦いでございました。ですので灌漑^{かんがい}の水というのは非常に貴重でございまして、わき水の出るところには丁重に樹木を植えて、祭っております。今でも阿蘇山の方に行きますと水神が祭ってあって先祖が営々と植えた樹木を守って水が枯れないようにしています。ですので、農民の水分（みくまり）の地としての山の水、そういう所の山の神という二つの意味があります。

こうしてみますと、女夫岩の麓では水が湧き出ますが（夫婦岩溜池）、農耕に必要な山の神、狩猟の伝承としての猪（岩）、そして水。これがセットとしてあるような場所はありません。こうしてみると宍道の女夫岩遺跡の例は貴重であるといえましょう。

もっとも、大船山のように雨乞いの神事をおこない地域の水田を潤す、同時に山の神、こういう場所は点々とあります。

もうひとつ大切なのは犬の方でございます。大国主命の伝承には犬の伝承が多いのですが、この場合の犬はアタ、つまり隼人、海人系、海の民の系統のことです。こういう宗像とかアタといった系統が日本海側をずうっと北上していった跡があります。

鳥取県に宗像^{むなかた}という地名がありますが、そのあたりにはアタ郷というのがあり、最近学説がいろいろ出ています。出雲地方には出雲郷（あ

たかや) という場所がありますが、そこに揖屋神社がありまして、ここでも犬の予兆によりまして葬事はぶりがごとがおこなわれています。どうも隼人という一族は犬を先祖とする犬祖伝承をもち、大陸とのつながりが深いのです。これは大和でもみられることで、アタという地名のところでは不思議と犬に関わることが多いのです。アタと御宅(みやけ)、特に隼人は管理と護衛にあたっていたのではないのでしょうか。

宍道町にも犬にまつわる伝承が残っており、犬石のある石宮神社の東には犬谷、犬灘という地名があり、あるいは憑き物ではない犬神の伝承が来待地区には残っています。海人系の伝承として非常に貴重なものではないのでしょうか。

こうしてみると石宮神社の犬の伝承は非常に大きな意味があるし、先ほどの猪(岩)の伝承も農耕と関わり現在にいたっている。つまり、二つのルーツをもつ犬岩と猪岩がともに一つとなっかつて伝承されていて、そういう古い伝承が今も息づいているのではないかと思います。

藤岡 ありがとうございます。民俗学の方からの新しい切り口というのは石宮か女夫岩かという単純な構図ではなく、もっと別のところから考えていかなければならないというきわめて示唆に富んだ発表だったと思います。さらに次には国文学の方から川島先生にお願いしたいと思います。

川島 先ほど国文学というように紹介していただきましたが、どちらかというと感じたままみたいなこととお話しして問題提起とさせて

いただきます。

あまり何の意識もなしにこの女夫岩の方に来ました。そのときには木幡社長さんと教育委員会の稲田さんと一緒に行きましたが、女夫岩の前に立ったとき、ちょっと帰ろうかなと、ここでは女性の方が少ないので話しにくいのですが、その形を見てちょっと驚いたのと、恥ずかしい気持ちがありました。木幡社長さんは、ああ、いい岩だとおっしゃっていたのですが……。



川島芙美子氏

この岩は琴引山神社の岩と同じ形をしています。ここでは大きな石が二つあり、その間にある本殿を拝むのですが、女夫岩も下から上って、二つの大きな岩の間を拝むような、意味深な形になっています。琴引山には、あれにもう一つ別の岩がありいんようせき陰陽石となっています。女夫岩の場合には陰石しかないのですが、地元の方によるとかつて中央家畜市場の方に大きな石があったとかで、これも陰陽石だったのかもしれません。

女夫岩の麓にありますと、池があり、池の近くの発掘調査では土器が数点出ていました。上に岩があり、下に池があるというなんともいえない配置になっていますが、池をぐるっと回って思ったのです。その池の下のところから岩の部分は見えたのではないかと。木が元々刈ってあったのか、池から岩までは木の種類が違い、後に植林されたようです。そうしますと昔は54号線のあたりからも場合によっては岩が

見えたのかなと思いました。現在も9号線と54号線が近くにあるように、古くから便利なところだったのでしょう。

ところで、『万葉集』を見てみますと、ここの地形にぴったりの歌がございましたので紹介しましょう。これは歌垣^{かがい}についてのもので、
 耀歌とも書きます。これは常陸^{ひたち}国の大きな山である筑波^{つくば}山麓で歌垣がおこなわれたときの歌です。

これを読みますと「鷲^{わし}の住む 筑波^{つくば}の山の 裳^も羽^は服^{きつ}津^つの その津^つに上
 にあどもいて 乙女^{おとめ}壯士^{おとこ}の 行き集^{ひとづま}ひ 他妻^{かさい}に 吾も交らむ 吾が妻に人
 も言問^{ことと}へ この山をうしはく神の 昔より 不禁^{いさめぬわざ}行事ぞ 今日のみはめ
 ぐしも勿見^{なみそ} 事も咎^{とが}むな」です。「他妻に 吾も交じらむ 吾妻に人
 も言問へ」ということで歌垣の意味は大体分かると思いますが、こ
 でわからないのは「裳羽服津の その津に上にあどもいて……」
 というところです。調べてみますと、山を女性に見たてて、その窪ん
 だところの水の湧き出るところ、その上に集まって、乙女、壯士が歌
 垣をおこなった……となるのです。

そうしますと、この女夫岩の麓の池も水が湧き出るところだそうですが、歌垣は『出雲国風土記』でみてみますと「宴（うちあげ）遊ぶ」
 として二箇所ほどでできます。一つは湯の湧き出るところ、玉造温泉、
 つまり神の湯です。もう一つは松江の大海崎にあります「邑美冷水^{おうのしみず}」、
 別名「目無水^{めなしみず}」です。

玉造の所を読みみますと「よりて男も女も 老いたるも少きも 或
 いは陸路をゆきかひ 或いは海路を浜辺に沿ひ 日々に集ひて 市を成

し うちむれて うちあげあそぶ」と書いてあります。

このようにみてみますと、最初に女夫岩と池の周りを訪れましたところ、ここは岩（陰石）があって、湧き水があって、デートをするのにいいなと思ったわけです。万葉集の筑波山麓の歌と状況が似ていますし、人々が行き集える場所です。秋の収穫祭として歌垣がおこなわれたと思われます。

『常陸国風土記』にはさっきの歌の内容がもう少し詳しく書いてありまして「筑波の峰は高く雲に秀でて 西の峰には男の山あり。」とありますが、筑波さんはやや大きな男体山とやや小さな女体山があり、男体山は登ることが禁止されていました。そして、その東の方の「女の山には岩があってその岩の側には泉が流れており、冬夏絶えない。そしてそこに諸国の男女が集い、春の花開き咲く時、秋の葉の紅葉する季節に、相携えて飲食をし、遊び楽しんで宴をする」とあります。これを読みますと、この女夫岩周辺の雰囲気はちょうどいいなという気がいたします。

ところで、筑波山のような大きな山とやや小さな山とが寄り添うようにある場所ですが、『出雲国風土記』に載る4つの^{かんなび}神名火山も角度によっては、いずれも二つに重なったように見えます。男と女が重なることを尊んだ古代の人々の心がわかります。特に女の山を尊んで、そこで歌垣をおこなったと書いてあるのです。

それではなぜ、歌垣などをおこなったかですが、これは国の力を富ませることは人を増やすこと、産めよ増やせよということです。リー

ダーが、今日は歌垣をおこなおうと祭日の日を決めて、人々を集めるのです。ですので、この歌垣には他国の人は入られない、入ると、どちらの子だろうということで、ややこしくなります。

このような祭りの場はあちらこちらにあったと考えられますが、それが大国主命などの神様と結びついていったと考えられます。

以上のことから、女夫岩周辺は大変おもしろいところで、土器も出てきているので、これからいろいろ証明されてくるのではないかと思います。

藤岡 ありがとうございます。さすがに文学者ですから、あそこでデートしたらいいという話になってきました。それでは宍道の町の方はこの女夫岩をどのように考えておられるのか、これまでは石宮神社に宍石と犬石があったわけでございます。なかなか複雑な気持ちではないかと思うわけでございますが、この辺のところを町民の代表として木幡実行委員長にお話を伺いたいと思います。それでは木幡さんよろしくお願いします。

木幡 私も含めて町内の人の多くがそうだとおもいますが、平成7年秋ごろ、女夫岩が松江―尾道線のルートにかかって取り壊されそうだという話を聞いて、はじめてその重要性を知ったように思います。

私もそれまでは『出雲風土記』に出てくる犬石、猪石は石宮神社のそれだとばかり思っ



木幡修介氏

ていました。『宍道町誌』にもそう書いてありますし、子供のころから思い込んでいる人が多い。私は何年前、島根県埋蔵文化センターから送ってきた『古代文化研究』という研究雑誌で服部旦という大妻女子大学の先生の論文を読んだのですが、それには犬石、猪石について主として大きさの計測という点から書いてあるのですが、結論として猪石は石宮神社の方であって女夫岩ではないとありました。やはりそうか、教えられてきたとおりであったのかと安心したくらいですから、今度、女夫岩が猪石だと聞いたときにはびっくりしました。

しかし、その後、だんだん話を聞いているうちに石宮神社説に疑問がわいてきました。そこへ平成8年3月、菟古館で関和彦さんの講演で「女夫岩の方が風土記の猪石の可能性が高い」というお話を聞いて、目からウロコが落ちたように思いました。多分、町内の多くの方が同じような思いをされたのではなかったでしょうか。

ただ、坪内権吉先生の話ですと、私の父は生前、猪石は女夫岩の方が正しいと言っていたそうですから、以前からそういう説もあったのだと思います。それがなぜ『宍道町誌』では、石宮神社説になったかということ、やはり町誌編纂の監修にあたった加藤義成先生の存在が大きかったのでしょうか。『出雲国風土記』研究の大御所だった加藤先生が、理由はわかりませんが石宮神社説をとられたということが決定的だったと思います。

私はかねがね素人の立場から、学界の“定説”というものに疑問をもっていて、昭和59年夏、斐川町の荒神谷から358本の銅剣が出

たときも、新聞社主催でシンポジウムを開いたのですが、大和中心の先生たちは頑として古代出雲の重要性を認めようとしません。自分の立場、あるいは自分の恩師の説に非常にこだわられる。定説というものがどういうふうに出て来ていて、どう守られていくのか。今回は猪石についての“定説”を見直すよい機会ではないかと思っています。

ところで、今回の問題点は2つあると思います。1つは先程から皆さんがお話になっているように女夫岩が古代祭祀遺跡として非常に貴重な存在であるということ。これはもう疑問のないことだからぜひ保存に努め、さらに調査を進めていただきたい。菟古館にある邪視文銅鐸は女夫岩の下から出てきたのではないかという人もいますが、ぜひ本格的な調査をお願いしたいと思います。

もう1つの問題は『風土記』記載の猪石、犬石が果たしてどれに当たるのかということです。それにつけ『出雲国風土記』には宍道社という神社の存在が書いてあります。しかし、現在その名前の神社は存在しません。それがどこにあったのか、その系統を引くのはどの神社なのかをめぐって、明治から大正にかけて大論争があり、大森神社、石宮神社、三崎神社の三者で本家争いをしたようです。猪石の問題もそれに絡んでいたのではないのかと私は推測しています。

因に三崎神社はもとは雲松寺山(字名は猪道山)にあり、明治40年代に山陰線開通の際に鉄道地内にあった雲松寺が雲松寺山に移り、三崎神社は氷川神社に合祀されたという経緯があります。『風土記』記載

の宍道社はどこにあったのかという問題も今後の研究課題になってくるように思われます。

いま、宍道町では新しく『町史』を編纂しようという計画が進んでいます。現在の町誌を見てみますと、猪石、犬石は石宮神社だと断定的に書いてあります。一方、女夫岩の箇所には、猪石だとする説もあるが石宮神社の方が正しいと否定されてしまっています。ここはこのままでは困りますね。

また、この際ですので、宍道町のあらゆる歴史事象について徹底的に調査し内容の充実した『町史』を作ってほしいと、この機会にお願いしておきたいと思います。

藤岡 ありがとうございます。宍道町というこの町の名前は『風土記』に出てくる『宍道郷』、宍道社というところからずっと伝えられている。現在でもその町名が使われている、ということは他には例のない希有な町名であるということでございます。これは本当でございますが、逆に宍道社という地名の起源になるような神社の名前がその後伝わらなくなって別々の名前になってしまう。だから石宮神社だ、大森神社だ、三崎神社だ、というような格好で論社になってしまうということは皮肉なことであります。

それで、平野さんはもちろんのこと、他のパネリストの方が一樣におっしゃいますことは、女夫岩というのが猪石であるかどうかを別にしても古代からの祭祀遺跡として非常に大事なものである。だからきちんと保存すべきではないかというような意見だったと思います。

しかし、いくつかの疑問点をここで考えておかななくてはならないと思います。ここで『出雲国風土記』の宍道郷の部分の積文を載せておきます。

(原文)

宍道郷。郡家の正西三十七里なり。所造天下大神命の追ひ給ひし猪の像、南の山に二つあり（一つは長さ二丈七尺、高さ五丈七尺。一つは長さ二丈五尺、高さ八尺、周り四丈一尺。）猪を追ひし犬の像、（長さ一丈、高さ四尺、周り一丈九尺。）其の形石となりて、猪と犬と異なることなし。今に至りても猶あり。故、宍道と云う。

(積文)

宍道郷の郷庁は郡家から正西19.778キロメートルのところにある。大国主命が狩りをして追いかけられた猪の形が、この郷の南の山に二つある。（その1つは長さ8.02メートル、高さ2.97メートル、周り17.63メートル。1つは長さ7.42メートル、高さ2.38メートル、周り12.17メートルある。）また、その猪を追いかけた犬の形もある。（長さ2.97メートル、高さ1.19メートル、周り5.64メートルある。）その形はどれも石になっていて、猪と犬とは見分けがつかないように同じ石である。それが現在でもそのままにある。そこで宍道（ししち）と言うのである。

(加藤義成『出雲国風土記参究』)

これは加藤義成先生のもので、これを見ますといくつかの疑問がわいてきますが、先ず、南の山に2つ石があるとなっています。この南の山というのはどこからって南の山なのか、白石の方からって南の山なのか、また宍道の方からって南の山なのか、この辺の解釈でだいぶん場所が変わってきます。

次に、石の大きさが出てきます。非常に具体的な数字が出てきます。そして、加藤先生の著作によりますと、宍道町の方と加藤先生は実際に石宮神社に行って犬石、猪石を測られて、『風土記』に記載されている数値と一致したということだそうです。これではもう疑う余地がないのでは、という気がします。

それからもう一つ、猪の石は女夫岩で、犬の石は石宮さんにあるという説のことです。そんなに離れたところに神様がおられるということはおかしな話ではないかと思えます。第一に、風土記にはこの3つの石が別々のところにあるとは何にも書いていない。先ほども木幡さんともお話ししておりましたが、これだけ正確に物事を表現しようとするならば、石が別々のところがあれば、犬石はこっちにあって、猪石はこっちにあるといったようなことを書いても良さそうではないかといったことを話していたんですが、こういったようなところについて平野さんに考古学的な立場から意見をお願いします。

平野 まず最初に「南の山」の南とはどこかということですが、先ず方角の起点となるところがあると思います。たとえば『風土記』の記述と発掘調査によって明らかになったものとして山代郷やましらのさとの正倉しょうそう

跡がありますが、これは国庁に山代郷の郷庁があって、そこから北西のところに正倉があるというように、起点になるところがあるわけです。この例からすると、「猪石が南の山に2つある」というその方角の起点をどこに求めるかで、そうすると起点と考えられる宍道の郷庁がどこにあったのかというのが問題になると思います。

現在のところ、宍道郷庁がどこにあったのかは考古学的には明らかになっていませんが、大字宍道地区にあったであろうというのが有力な説です（服部且論文など）。図4の地図でいいますと赤丸がしてあるところです。そして、そこから南にいきまして家畜市場やや北の二重丸が女夫岩です。このことから考えられるのは、郷庁を大字宍道地区とすれば女夫岩が猪石の可能性があるということです。

ところで、先ほど木幡さんもおっしゃっておられましたが、服部且先生は厳密に女夫岩や石宮神社の石を測っておられます。そして論文に測点をきちんと書いておられまして、後で他の人が測っても変わらないというぐらい非常に細かな研究をされ、その上で猪石は石宮神社のものである、とされています。それでこの「南の山に2つあり」の南をどう考えておられるかという点、起点は一つの点ではなく、宍道地域そのものの南にあると解釈しておられます。つまり石宮神社というのは宍道の地域の南にあるので、石宮神社で良いのではないかとしています。

同じ『出雲国風土記』でも、山代郷正倉跡の場合は、郷庁という方位の起点となる場所が明確ですが、猪石の場合は、方位の南の起点と



図4. 女夫岩位置図 (○女夫岩、○穴道郷庁推定地、△石宮神社)

なる場所が明確でないという点が、私は気になります。

先ほど白石先生や川島先生の話の中で祭りのことが出てきました。新聞の女夫岩遺跡発掘調査の記事を見てみますと「土器の種類から祭りの際、添え物をもったと考えられる……」とあります。古代のお祭りをしたところでは祭祀用の土器や、ミニチュア土器、特殊な祭具を作り、それらを使ってお供物をささげていたようで、そういう調査例は全国的にもいくつもあります。ですから、女夫岩遺跡から祭祀用と考えられる古墳時代中頃の土器が出土したことから、『風土記』の時代以前からお祭りをしていたんだろう、というように考えるわけです。

おふたりがおっしゃっていたように、女夫岩でお祭りが行われていたということは民俗学、国文学の立場から予測されるわけですが、今回、それらを考古学の資料で裏付けたのです。女夫岩遺跡で見つかった土器がこれから公開されれば、今後は考古学の方からこういった形の土器があって、それが全国の他のお祭り例からすると、どのようなお祭りがされていたのかということについて実体がわかってくるのではないかと思います。

それからおふたりに共通していたのが水が湧き出るところについての話です。このことで代表的なものとして、八重垣神社の裏に鏡の池があり、そこからは実際に須恵器が出ており、宝物殿に保管されています。こういうことから水が湧き出るところはお祭りの対象、収穫祭などの信仰の対象になるということが知られています。ですか

ら女夫岩の池（夫婦岩溜池）、あるいは、その周辺から祭祀用土器などが出てくればおふたりの話は考古学的に立証できることになり、女夫岩が湧き水とセットになって、古くから信仰の対象となっていたと言えるのではないかと思います。

山陰中央新報の記事として「風土記の舞台 保存の価値（「青銅器」出土の可能性も）」というものがありません。（前ページ）その中に先ほど木幡さんがおっしゃいました木幡家の銅鐸のことについて書かれています。この銅鐸は表面に目が文様化されてまして、その下の方に鳥（水鳥）が描かれています。このような銅鐸は全国で4つしかありません。

お祭りの形態などについては国文学や民俗学の方にお聞きした方がいいと思いますが、自然の大きなもの、誰が見ても驚くようなもの、おそれを感じるようなものが古くから信仰されていることがわかると思います。

考古学的な関連から女夫岩遺跡の周辺からこういったものが見つかっているのかをみてみましょう。宍道町教育委員会では今まで文化財関係の史料集、報告書を数多く出版されていますが、それを読みますと、現在、中央家畜市場になっている清水谷・矢頭遺跡からは弥生時代の終わり頃から古墳時代にかけてのお墓、建物跡が見つかっています。さらに、現在古墳公園になっている29基の水溜古墳群、また女夫岩の北東方向に伸びる才の谷などからは横穴墓群が多数見つかっています。

以上のようなことを踏まえてみますと、女夫岩遺跡は古くからこの地域のお祭りの場であり、『風土記』成立期にその記述に関わっていたと考えるもおかしくないと思います。

藤岡　ありがとうございました。考古学的な遺物等からしましても女夫岩の周辺は祭祀遺跡であった可能性が強いということでした。ここで白石さんにももう少し意見を述べていただきます。

白石　^{いわくら}磐座があり、湧き水があるといったように両方ともあるという場所はきわめて少ないのです。そして、さらに猪（宍）岩といったような猪の伝承、狩猟的な猪に関わる伝承があるという点で非常に古くて独特のものがあるのではないかと思います。特に狩猟伝承を伴う農耕儀礼は日本の原初的な世界です。

もう一つ猪と犬に関わる伝承で、たとえば「^{いぬかい}犬飼」というものがあります。

この「犬飼」というのは何をつかさどるのかと申しますと狩猟があります。このほかにも警護もあります。管理もあります。この管理、警護をするような犬に関わる場所は農耕地とやや離れたところにあります。離れたところから管理し警護する。そういう意味で猪石と犬石が離れたところにあるというのは決しておかしくない、むしろ当然ではないかという気がします。

それからもう一つ農耕とともに考えておかななくてはならないことは鉄であります。宍道町には鉄の古い地名や地崩れした（かんな流しのため）と思われる地名がたくさんあります。こういったことから今後

の研究課題としまして農耕の文化とともに鉄の文化をもう一度見直してみる必要があるのではないかと思います。こういった鉄というものがなければ農耕というものができないということで鉄と農耕を両方見て考える必要があると思います。

また、鉄に関わって鶯うぐいすが出てきますが、宍道町には鶯と鉄との伝承が数多くあります。特に金屋子かなやご信仰以前の古い鶯の地名があり、また、地崩れたような地名も多く残っています。農耕に併せて、鉄に関わることを考えていくことが必要でしょう。

私は猪（宍）岩について農耕との関係を説明しましたが、純粋な山の神は一つで、山の神は男の神か女神です。これが農耕の神となると女夫神となり、大地と精霊の交わりによって豊穰をもたらすようにと願うようになります。やがてこれは、女夫岩信仰にもあったように安産の信仰が生まれるなど、さまざまな形をとります。

つまり、農耕、鉄といったような、いろいろな伝承を象徴する意味で猪（宍）岩というものが存在し、それを管理・警護するような意味としての伝承として石宮神社の犬石があるのではないかと思います。

藤岡　　ありがとうございました。犬石と猪（宍）石は別に別れていてもいいのではないか、むしろ離れていた方が当然ではないか、というようなお話でございました。この論拠で行きますと女夫岩の方が猪石で石宮神社の方が犬石ではないかというような解釈ができるように思われます。川島先生どうでしょうか。

川島　　私は陰陽石とか、色っぽいことばかり考えているように見ら

れそうですが、猪や犬の話は世界的にもギリシャとかでいろいろ残っており、それが石になるという伝承も残っています。犬と、猪、甲乙つけがたいのでどちらも石にしたとも考えられますが、やはり食糧としての猪に感謝したのではないのでしょうか。

「猪の子さん」の祭りのような例として現在もみられますし、陰陽石の祭がやがて自然への感謝の気持ちの祭に変わっていくということも考えられます。

ところで、宍道は来待石の産地で、来待ストーンの近くには久戸千体地蔵のようなすばらしい場所もありますが、石の文化はどのように出来たのでしょうか。

道具の歴史を調べると古代においては石の道具が中心です。木もありますが、石がないと木の道具も出来ません。石によって人間は造られたといっても過言ではありません。そういうことから石に対する信仰が生まれたのではないのでしょうか。

石の遊び、石に関わる行事も多く残っています。そういう意味で、女夫岩、石に対する信仰が最初のものではなかったと思います。

それから733年に書かれたといわれる『出雲国風土記』には大穴持命おおなもちのみこと（大国主命）が多く登場しますが、私の勝手な解釈では、この女夫岩は陰陽石から始まったものが、犬石や猪石などの信仰や伝承へと、『風土記』を記載するときに中央の手、意識が入って、変えられていったのではないか、などと考えたりしています。琴引山の伝承についても元々あった伝承に大穴持命が関わっていく。犬石、猪石の伝承に

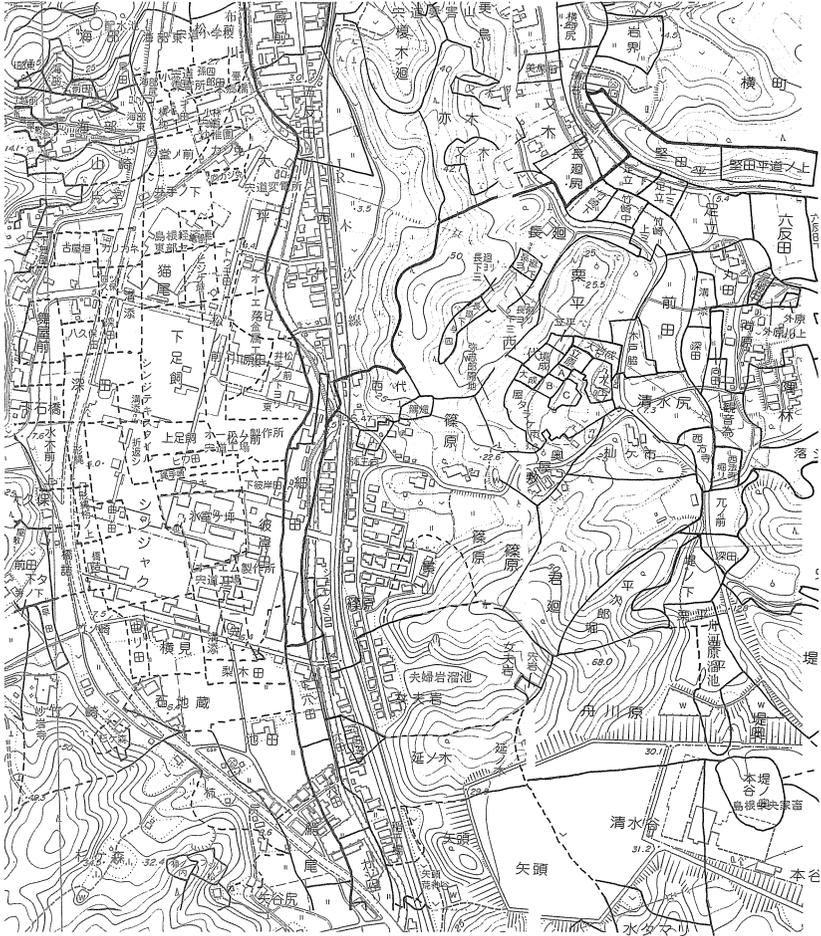


図5. 女夫岩遺跡周辺の^{あざな}字名 (突道町歴史史料集・地名編より)

ついても元々あった話に、大穴持命の登場など、『風土記』の色彩が付け加えられたとも考えられるのではないのでしょうか。

いずれにしても宍道町は石の文化に象徴される場所ですから、女夫岩遺跡を大切にしていってほしいなと思います。

藤岡 ありがとうございます。結局そういうことになりましょうか。皆さん『風土記』記載の猪石がどちらかということをご期待されますが、なかなか難しいということでしょうか。木幡さん、この点でいかがでしょうか。

木幡 一つ付け加えて起きますと、女夫岩は大森神社の所有なのですが、大森神社は鎌倉時代までは現在OM製作所内の氷室ケ坪にありました。そこからは女夫岩が遙拝できる、ということから考えますとあのあたり一帯が関連をもつ信仰の場所であり、その中に女夫岩が存在したと考えられます。

それと『風土記』の記述についてですが、「南の山にあり」は私も女夫岩の位置が妥当だと考えます。ただ、猪石と犬石の場所については記述があいまいで、同じ場所だとも違う場所だとも書いてありません。別の場所であるのなら、大きさについてあれだけ精密に書くくらいですから場所は別だと書くのが普通ではないか、同じ場所なら犬石がそこになくはなりません。どちらにしても疑問が残るわけで、現在の資料だけでは判断が難しいですね。

現在、たまたま女夫岩が脚光を浴びていますが、その時々話題性で白黒つけることは控えたいですね。やはり慎重な調査を待つべきだ

と思います。

藤岡 いろいろな議論をしてまいります中で、^{かっ かようそう}隔靴搔痒の感はありますが、女夫岩遺跡周辺は古代からの聖地であったことは間違いないとおもいます。これが『風土記』記載の猪石であるかどうかの結論は今後の調査、研究に待ちたいところです。どうか宍道町の皆さん、ここにご参会いただいた皆さんはもとより、ほんの少し忘れられかけていた女夫岩について少し思い出していただいて、大事な古代からの信仰として後世に伝えていっていただくとともに、文化そのものを大事に育てていって頂きたいと思うところです。本日はありがとうございました。

(1996年8月4日、宍道町中央公民館にて)

シンポジウム

- コーディネーター 藤岡大拙（島根県立風土記の丘所長）
 パネリスト 木幡修介（山陰中央新報社社長、シンポジウム実行委員長）
 白石昭臣（島根国際短期大学教授）
 川島芙美子（島根県立松江工業高校教諭）
 平野芳英（島根県古代文化センター主任）

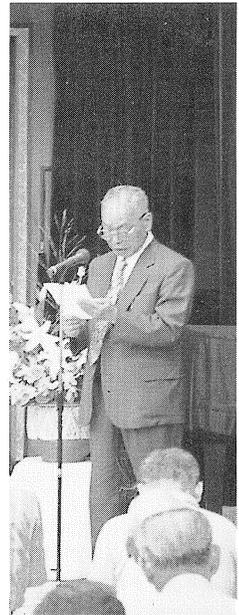
女夫岩遺跡シンポジウム実行委員会構成団体

- 宍道ふるさと伝承の会（坪内権吉会長）
 宍道町観光協会（木幡修介会長）
 宍道町婦人会（犬山春江会長）
 宍道町商工会（奥田正雄会長）
 宍道町神社神職会（遠藤春夫、秦武男代表）
 大森神社総代会（宮廻清吉代表）

- 事務局 犬山英男
 梶谷博己

- 記録テープ編集 宍道町教育委員会

- 写真、図面 島根県埋蔵文化財調査センター、
 宍道町教育委員会



坪内権吉伝承の会
 会長

宍道町ふるさと文庫11

女夫岩遺跡を考える

1996年10月1日 第1刷発行

2003年3月31日 第2刷発行

編 著 女夫岩遺跡シンポジウム
実行委員会

発 行 宍道町教育委員会(宍道町菟古館)
八束郡宍道町大字昭和1番地

印 刷 柏木印刷株式会社
松江市国屋町452-2

